

〔2〕 生活一般による実践

(1) 自分の進路に目を向け、働くことの楽しさに気づいた実践〈1年〉

① 基本的な考え方

4月に「高等部に入学してきたところだけど、卒業したらどうする？」と聞いてみた。最初は誰も答えなかった。そんなこと想像したこともない、という様子だった。連絡入学生に「去年の卒業生はどうしましたか？」と聞いたところ「働いています」という答えが返ってきた。3年後、高等部を卒業したときには社会参加が待っている。3年間はあっという間に過ぎてしまう。1年の時から、自分の進路について真剣に悩んで考えていくことの積み重ねは、充実した学校生活や卒業後の生活に前向きに向かっていく姿勢につながると考えた。また、「働くことの楽しさ」を知ることは、将来、働く喜びにつながると考えた。

進路に対して考えるための手がかりをたくさん持っておらず、また、まだはっきりとした結論を出さなくてよい1年生のこの段階では、いろいろな進路先があることを知ったり進路について考えていこうとする気持ちを持ったり、自分のことを振り返ったりして、自分の進路について悩み、考えることを大切にしていきたいと考えた。

また、「働くことの楽しさ」については、生徒にとって最も身近な家庭に目を向け、そこでの「お手伝い」を「自分に任された仕事」と位置付け、仕事の大切さや責任を感じ、その仕事をすることや、家族の喜んでる声や姿を見ることで、働く喜びを感じるのではないかと考えた。

② 実践事例

単元名 「働く生活」

a 題材選定について

1年生の時から繰り返し学習を積み重ねていくことが大切だと考え、次のような年間計画を立て、年間を通して学習していくことにした。

表 - 5 年間指導計画（生活一般・・・進路に関わる学習）

月	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
題材名	卒業したらどうする	どこで働く	進路は誰が決める・どんな進路があるだろう		現場実習に向けて	現場実習を終えて		どこで働く・どこで暮らす			2年生に向けて

少しずついろいろなことを知ったり、繰り返し考えたりするなかで、卒業後のことを真剣に考えていくよう題材を配列した。

b 支援の工夫

「どこで働く(5月)」「進路は誰が決める・どんな進路があるだろう(6・7月)」「現場実習を終えて(10月)」の指導の様子を例に挙げ、支援や生徒の変容について述べていく。



授産所の方の話を真剣に聞く生徒

題材と内容	支援	生徒の変容
<p>「どこで働く」(5月)</p> <p>1.進路に対する今の思いを発表し合う。</p> <p>2.友だちの思いに対して意見を発表したり、それを基に自分の進路について振り返る。</p>	<p>1.「僕卒業したら会社で働いてたくさんお金を儲けるんですよ」と話していたC男を最初に指名し、「どこで」「何をして」等の質問をすることで、発表しやすい雰囲気を作り、発表の内容もつかめるようにする。</p> <p>2.進路に対する思いや意見を板書し、振り返りやすくした。 意見が出ないときは「これについてはどう思いますか」と考えることを示すことで、話しやすくなり指導者の考えの押しつけにならないようにした。</p>	<p>1.大阪の会社に勤めたい、東京で漫画家になりたい、この辺りで魚屋さんになりたい、S作業所で働きたい等、今の思いを素直に発表した。</p> <p>2.東京や大阪に通うのは大変だという意見が出て、その考えを基に自分で振り返り、それぞれ住んでいる所の近くに働く場を求めたほうがいいことに気づいた。</p>
<p>「進路は誰が決めるどんな進路があるだろう」(6・7月)</p> <p>1.自分の進路は誰が決めるか考える。</p> <p>2.進路について知り事業所・授産所・作業所の特徴をまとめる。</p>	<p>1.「誰が働くのだろう」等自分が決めることに気づく声かけをしていく。</p> <p>2.実際に見学をし、現場の方から話を聞いたり、様子を見たりする。 ・それぞれの違いが特徴的にあらわれる観点を示す。</p>	<p>1.最初、家の人、先生、会社の人が出てきたが「自分」は出てこなかった。声かけをすることで自分が一番大切だと気づいた。</p> <p>2.漠然と会社に勤めたいといていたが、進路にはいろいろな所があることに気づき、自分の進路についての考えが広がった。</p>
<p>「現場実習を終えて」(10月)</p> <p>1.現場実習の様子を振り返る。</p> <p>2.自分の課題に気づく。</p>	<p>1.ワークシートを準備し、自分で振り返りやすくした。</p> <p>2.振り返れないときには、「休憩時間に話をしましたか」等様子を思い出す声かけをし自分で課題に気づくようにした。</p>	<p>1.考える手がかりになり、自分の力で様子を思い出し記入することで振り返っていた。</p> <p>2.自分のことを客観的に見つめ直すことは難しく、漠然と「良かったです」「いけませんでした」に終わってしまいがちだったが、声かけをすることで何が課題だったか、どうすればいいのか気づいていった。</p>

c 指導を終えて

学習を積み重ねていくことで、生徒の中に少しずつ進路が現実味を帯びた問題として意識されてきつつある。このように1年生から、進路について少しずつ知ったり考えたりする中で、卒業後のことを真剣に考えていこうとした今回の取り組みは非常に有効であったと思われる。自分に適した進路を自分で気づき選んだり、自分の課題に気づき努力したりできるように、更に学習を重ねていきたい。

題材名 「家庭での役割」

a 題材選定について

一番身近な家庭での「お手伝い」を「仕事」という意識をもって取り組むことで、仕事に対する責任感を育て、家族の人から認めてもらうことで、働くことの喜びにつなげたいと考えた。

b 支援の工夫

- ・毎日継続して取り組める内容を選び、チェック表で確認する。
- ・家の人と連携をとり、その仕事は必ず本人に任せてもらうとともに、適切な評価を与えて認めてもらうようにする。

[D男の例]

自分で仕事を決めることの難しいD男については担任が母親と相談し、ゴミ捨てと買い物の時の荷物持ちをすることになった。

最初は、買い物のとき、車からなかなか降りようとしなかったが、毎日繰り返すことで、1か月たった頃からは車から降り、荷物を持つようになった。7か月たった今では進んで荷物を持つようになってきた。

家での様子を生活ノートで細かく連絡してもらい、それを朝の会や帰りの会で紹介し、意欲付けを図った。友だちからの拍手や家の人々の励ましで仕事に喜んで取り組むようになってきている。

c 指導を終えて

このように、どの子も責任をもって仕事に取り組もうという姿勢が見られるようになってきている。また、自分の仕事が役立って喜んでもらっているという満足感から、他の仕事にもすすんで取り組むようになったという声が家庭から寄せられている。

③ 反省と課題

進路についての学習を更に繰り返していくことで、自分で考えて決めていこうという気持ちを強めていきたいと考えている。この前向きな姿勢は、充実した学校生活や卒業後の前向きな姿勢にまでつながっていくと考えている。

家庭での仕事は、働く喜びを味わい、責任感を育てるといった面で非常に有効だった。家庭の協力を得ることにより、生徒の力が着実に付いてきている。 (遠藤真山美)



家庭での仕事のチェック表

(2) 目的を意識し、「作るおもしろさ」「食べる楽しみ」

「人と分かち合う喜び」を味わった調理活動の実践<2年>

① 基本的な考え方

調理にはさまざまな学習内容が含まれており、生徒が発展的に取り組めるよい活動である。明確な目的、材料の選択、買い物（金銭感覚）、技能の習得、道具の選択、盛り付け飾り付けのセンス、味覚・嗅覚・触覚等の感性の磨きなど、授業づくりの切り口も多様である。具体的な作業活動や後で食べる楽しみもあるので、ほとんどの生徒が主体的に参加できる学習である。

本学級は男子ばかり 8名のクラスであるが、作ることも食べることも大好きである。食が細く好き嫌いの多い I 男も作る作業には好んで取り組む。調理活動のねらいを次のように大きく 3つに絞り、生徒が主体的に楽しんで取り組める要素についてまとめてみた。

「作るおもしろさ」

- ◎自分が作りたいものを作れるおもしろさがある（製作意欲）
- ◎道具の使用や新しい技能習得のおもしろさがある（学習、挑戦、定着）
- ◎分からないときは真似をすればよいし、余裕があれば自分なりの工夫ができる
（負荷、成就感、満足感）

「食べる楽しみ」

- ◎いつ・どこで・だれと・何のために等、目的やねらいが明確である（期待感、見通し）
- ◎味わう楽しみがある（満足感、期待感）
- ◎料理を完成させなければ食べられないという必然的な結果がある
（責任感、成就感）

「人と分かち合う喜び」

- ◎仲間と楽しみを分かち合う喜びがある（一人ではない、仲間意識）
- ◎人の作った物、種類多くいろいろな物が味わえる（期待感、満足感）
- ◎現実に即した評価ができる（おいしいかおいしくないか～判断基準は自分）
- ◎よいことは認めて真似ができる（前向きな姿勢）

このように、調理活動は目的を明確にすることによって、生徒の自由な発想や形を大切にしながらゆとりを持って取り組むことのできる心も身体も満たされる活動である。ねらいに応じた題材を選定し、生徒の思考の過程を大切にしたい実践について述べてみたい。

② 実践事例

題材名 | 「弁当作り～バイキング方式～」

a 題材選定について

5月の学部遠足は、教育実習生と親しくなるために設定されている。実習生も生徒もお互いにまだ遠慮している時期に、遠足に行ってゲームなどを通して親しくなるのもよいが、なにより食を共にするということに意義がある。そのためには作る段階から仲間意識を高めて期待感を持って弁当作りをするのが効果的であると考えた。

自分なりにバランスを考えておかずを入れたり、楽しんで盛り付けたりすることで、食べる楽しみへもつながると考え、バイキング方式にすることにした。

b 支援の工夫

活動の流れと支援の工夫は次のとおりである。

ア、皆がそれぞれ自宅から弁当のおかずになりそうな材料を持ち寄る。

- ・調理方法を家の人に教えてもらう
- ・冷蔵庫の中にあるもので工夫をする
(新たには買わないで手軽にできる物)

イ、持ち寄りの材料を分担して調理する。

- ・自分が用意した物の調理方法を皆に知らせる
- ・持ち寄った材料を調理方法でまとめ、自分がしたい調理方法を選ぶ
(茹でる、炒める、電子レンジを使う等)
- ・パッケージの説明を見たり、人に聞いたりしてできるだけ自分で作る
(ペアリングを工夫する)

ウ、バイキング方式にテーブルに置いて各自盛り付ける。

- ・主食や副食の種類を意識して並べる
(ふりかけ、のり等)(肉類、野菜類、果物類等)(醤油、マヨネーズ、バランの使い方等)
- ・各自が用意した弁当箱を使う
(教師が意図的に携帯用の弁当箱も用意し、弁当箱の工夫についても教える)



c 指導を終えて

家庭へはプリントで学習の意図を伝え、おかずの材料を選ぶことから協力を得た。一人ひとりが何を持ってくるかわからないので、全体のバランスを考えて教師は足り苦しいであろうと予想される材料を用意しておいた。8名が持って来た材料は各種様々で、家庭での親子の会話が聞こえるようであった。

実習生と協力しながら作ったおかずを大皿に盛ると、20種類以上のおかずができた。盛り付けは「好きな物ばかり入れない」とだけ注意して、あとは自由にした。みんなでわいわい話しながらの盛り付けはとても楽しいものだった。人気のあるおかずはすぐなくなるので、普段はのんびりとマイペースの生徒も多少あせりながら動いていた。盛り付けた弁当は、栄養や色彩のバランスを見て、教師が一言アドバイスをした。

遠足では、実習生と生徒は作った弁当を見せ合いながら楽しそうに食べていた。

題材名Ⅱ 「冷たいデザート作り」

a 題材選定について

季節感を取り入れた調理の工夫をねらって、「冷たいデザート作り」を試みた。今までに簡単なおやつは何度か作った経験がある。「そろそろ夏」「暑い」「冷たい物が食べたい」・・・という思考の流れを経て季節感を意識させて、冷たいデザート作りの必然性を大切にしたい。

「季節にふさわしいもてなしのお菓子」を知識としても教えたいので、「食べたい」

「作ってみたい」だけでなく「食べてもらいたい」という気持ちも大切にして、メニューを決めることにした。自分が作った物を友だちにも食べてもらうという責任感や喜び、そして友だちが作った物も味わうという期待感を持ちながら、調理活動に取り組んだ。

b 支援の工夫

活動の流れと支援の工夫は次のとおりである。

ア、メニューを決める。

- ・知っているデザートの名前を発表する
(経験、知識を生かして)
- ・実物を見ていろいろなお菓子があることを知る
(教師が用意した各種デザートを提示する)
(盛り付けも工夫する)
- ・味見をする
(「食べてみたい物」→「作ってみたい物」)



イ、グループごとに買い物、準備、調理をする。

- ・作りたいメニューの希望でグループに分かれる
(メンバーの調整はしないで教師が援助に入る)
- ・友だちと協力しながら作る
(手順表を見たり、説明書を読んだり、教師に聞いたりしながら)
- ・冷たいデザートに相応しい器を選ぶ
(教師はできるだけ多くの様々な器を、前もって用意しておく)



ウ、できあがったデザートの中から、食べたいものを2つ選ぶ。

- ・できあがりを見て「食べてみたい物」を2つ選ぶ。

c 指導を終えて

「作り方を知っているし、好き」といって一人で“フルーツ白玉”を作ったK男、「簡単できれい」と“ゼリー”を選んだJ男とM男、「簡単だし、好き」と“プリン”を作ったG男とI男・・・この2人は「飾り付けをし過ぎて失敗」と自分たちで反省していた。初めての挑戦で“クレープアイス”を作ったF男とH男とL男。H男のリードで自分たちなりに努力したが、3人共のんびりとマイペースなので、アイスクリームが溶けてしまった。できあがりを見て、自己反省したり、「おいしそう」「きれい」と賞賛したりする声も聞かれた。食べる時は、「こっちの方がいい」と友だちが作った物ばかり選んだ生徒もいた。

③ 反省と課題

調理活動は、メニューを決めるところから大切にしたい。「なぜ、これを作るのか」という意図が生徒に理解されていないとただの作業になってしまうからである。その場限りの楽しみで終わらせないで、パターンの積み上げを応用して自分なりに工夫したり、発展させたりする力をつけたいと思う。そのためには、生徒の思考の流れを大切にするとともに、その活動の必要性を理解させ、活動そのものを楽しませるという教師の支援の工夫の流れ(指導や援助の必然性、柔軟な対応等)もとても大切だと実感した。活動の必要性、おもしろさが生徒にとってより身近に感じられるような題材の選定に努めたい。(田村洋子)

(3) 青年期にある生徒の、思いと主体性を生かした校外宿泊学習の実践

〈合同・縦割りグループ〉

① 基本的な考え方

- ・生徒の思いに沿った活動内容の検討に努める。

生徒の、主として経験を通した発想も大切にしていきながら、「青年期にある生徒」ならではの達成感や成就感に結びつくと思われる活動内容を示し、それらが豊富にあることを知らせるなかで、生徒の思いに沿った活動内容を決定していく過程を大切にす。

- ・生徒への支援の在り方を検討する。

高等部の教育課程上、時間の制約はあるが、生徒一人ひとりが、主体者として取り組む場を保障することにより、やり遂げた後の達成感・成就感がより一層深まり、生徒にとって手応えのあるものとしていきたい。生徒の自由な発想を生かしながらも、教師も絶えず多様な発想を念頭に置きながら、場合に応じて、生徒とともに同じ立場を取りながら支援を工夫していく。

- ・実行委員会の組織づくりと、見通しを持った活動

実行委員会を組織し、生徒の思いを十分に反映しながら、生徒一人ひとりが主体者として、多様な活動ができる場を保障する見通しを教師とともに作り上げていく。

活動内容、班編成など、教師と相談しながらも実行委員で提案し、生徒全員の了承を得ながら当日までの大まかな計画を立てたい。

② 実践事例

題材名 「船上山宿泊学習」

a 題材選定について

高等部生徒全員での校外宿泊学習は、年1回である。この校外宿泊学習が、「青年期にある生徒」の期待に応えられ、思いきり活動し切ることができる題材として、「船上山」を選定した。

- ・自然とのふれあい

散策コース、登山コースなど、生徒の実態に応じてさまざまな自然とのふれあい方が選択でき、ゆったりと楽しめる。

- ・「船上山少年自然の家」での活動内容

生徒の期待に十分応えられる、さまざまな活動内容が準備されている。特に、雨天時の対応にも、さまざまな選択肢が考えられる。

- ・集団活動(規律)を通しての達成感・成就感

生徒一人ひとりが、集団のなかの一員として準備してきた役割を果たすことで、集団活動のすばらしさを実感し、達成感や成就感を味わうことができる。

生活時間、宿泊、食事、浴室・トイレの利用、5分前行動など、公共施設の利用の仕方の評価を、集団のなかの一員として受け止めることができる。

b 支援の工夫

実行委員会を発足するまでに十分に下見(当日までには3回)をし、あらゆる可能性を探っていき、できる限り生徒の思いと主体性が生かせるように努めた。また、班活動と係活動との2つの活動を位置づけ、どの生徒にも一人二役の活動を保障することで、この宿泊学習が、達成感・成就感を持って終わられるよう、見通しを持って学習を進めていった。特に、「青年期にある生徒」ならではの楽しみ方が工夫し易い『キャンドルファイヤー』を、この題材の中心に据え、班活動や係活動に位置づけた。

ア 実行委員会の発足と活動

○実行委員

各学年と実行委員会との連携を密にするよう、各学年より2名、計6名の実行委員を募集した。生徒の思いを大切にしながらも、特に、今後リーダーとして生かしてきたい生徒を人選していった。

○実行委員会の活動

・活動内容の検討

生徒からの要望、実行委員の思い、また、教師の願い(自然に親しんで欲しい、集団活動にもっと喜びを見い出して欲しい)を出し合い、自然の家の「研修の手引き」も参考にしながら活動内容を固めていった。

・班編成の検討

23名の生徒が班活動するには4班ぐらいが適当ではないか、班長は実行委員のなかから決めるのがよいのではないか、班員も実行委員会で編成してみてもどうか、という教師の問いかけに、やる気満々の姿が見受けられた。なお、班員の編成にあたっては、好き嫌いといった個人的な見方での班編成とならないよう、実行委員としての自覚を促すとともに、教師も事前にじっ

くりと話し合いを持った。

イ 班活動・係活動と学習計画

班活動では、主として『キャンドルファイヤー』のスタントの準備を中心に、また係活動では、研修係がその運営を、食事係は、野外炊飯の準備を中心となっていくよう、班活動と係活動とが有機的なつながりを持つように、学習計画を組み立てていった。

7月9日(水) 7月10日(木)

学校 発	野外炊飯
船上山登山 (野外散策・室内足跡 ハイキング)	(室内制作活動)
キャンドル ファイヤー	学校 着 ()内は雨天時

<班活動と係活動の主な内容>

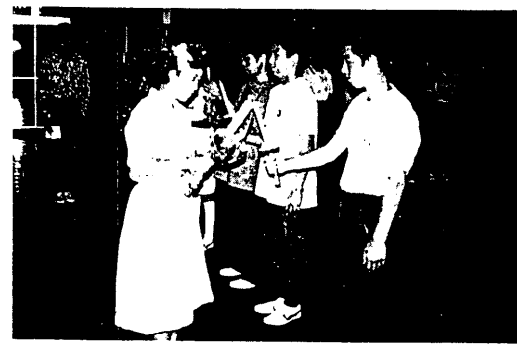
班 活 動	<ul style="list-style-type: none"> ・5分前行動の徹底(集合、整列) ・キャンドルファイヤーのスタント(出し物) ・各班の反省会 ・清掃活動 ・野外炊飯
班 長	<ul style="list-style-type: none"> ・引率者と班との連絡 ・5分前行動の徹底 ・宿泊学習の計画、立案 ・結団式、解団式、出 会いのつどい、別れのつどい、夕べのつどい、 朝のつどい、各班の反省会などの進行
研 修 係	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンドルファイヤーの運営 (火を迎える儀式、親睦の火、火を送る儀式)
食 事 係	<ul style="list-style-type: none"> ・食事の準備、食事の連絡、後かたづけの指示、 食堂の清掃 ・座席決め ・野外炊飯のメニュー決めと、手順の確認、班員の役割分担
生 活 係	<ul style="list-style-type: none"> ・シーツの配布と返納 ・入浴の順番決めと、時 間の確認 ・掃除場所の確認と分担 ・班員の 健康観察 ・寝具の取り扱い

〈当日までの学習計画〉

6/20 (金)	昼休憩 (1:00~1:30) 実行委員会発足 (教育実習室) [実行委員の役割、班・係の役割、どんな班編成がいいのか、班編成を試みる。]	
21 (土)	有志による船上山登山 (教師)	
23 (月)	昼休憩 (1:00~1:30) 実行委員会 (教育実習室)	
24 (火)	[3つの研修の場があることを知らせ、支援を受けながら研修内容を考える。]	
27 (金)	昼休憩 (1:00~1:30) 実行委員会 (教育実習室)	
30 (月)	[班編成、研修内容の検討と、オリエンテーションの準備をする。] 2校時 オリエンテーション、[研修内容、班編成について] (児生会室) 3校時 班活動 [係の決定、野外炊飯のメニュー希望、キャンドルファイヤーでの希望、スタッツの話し合い] (1班...1年教室 2班...2年教室 3班...3年教室 4班...児生会室) 4校時 係活動 [仕事内容の確認、話し合い] (班長...3年教室、研修係...児生会室、食事係...1年教室、生活係...2年教室)	
7/1 (火)	昼休憩 (1:00~1:30) 実行委員会 [しおり作り] (教育実習室)	
2 (水)	昼休憩 (1:00~1:30) 実行委員会 [しおり作り] (教育実習室)	
3 (木)	3校時 班活動 [整列時の並び順の決定、スタッツの練習] 4校時 係活動 [係活動の準備] 4校時 係活動 [係活動の準備] 4校時 係活動 [各係から連絡・要請 (話し合い)、スタッツの練習]	
5 (土)	昼休憩 (1:00~1:30) 実行委員会 [しおり作り] (教育実習室) 1校時 オリエンテーション [しおり配布、日程・持ち物などの確認] (児生会室) → 教室に帰ってしおりの記入 (各学年)	
8 (火)	2校時 班活動 [スタッツの仕上げ、整列時の並び順の確認] 3校時 係活動 [仕事内容・準備の最終確認] 4校時 オリエンテーション [前日扱い] (児生会室) → 各学級で前日指導	
9 (水)	船上山宿泊学習	
10 (木)		1・2校時 宿泊学習のまとめ [班別→係別→全体]
11 (金)		

ウ 宿泊学習のようす

2日間ともあいにくの雨にもかかわらず、生徒たちは、野外散策、室内追跡ハイキング、キャンドルファイヤー、そして室内制作活動などに取り組んだ。それぞれの活動に、自分の役割を一生懸命果たそうとする姿が見受けられ、班員としての自覚、集団のなかの一員という意識の膨らみを感じ取ることができた。その意識が、「青年期にある生徒」にふさわしい、規律ある集団生活が送れたことにも表れていた。特に、キャンドルファイヤーでは、厳粛な場面と盛り上がる場面とを自然に感じ取り、生徒一人ひとりがその雰囲気大切にしながら、生き生きと活動する姿が見られた。



キャンドルファイヤーのようす

c 指導を終えて

校外宿泊学習を終えた日の翌日、班別と係別に反省の時間を設けた。そこでは、期待していた生徒の反応が数多くみられた。「船上山」は、生徒に思いきり活動し切る場を与えてくれる題材として適当であったといえる。そして、生徒の思いを生かし、主体的に活動できる適切な支援を工夫し易く、集団活動のまとまりを通しての生徒の達成感や成就感を得ることができた。そのことは、12月の学部集会で実施した『忘年会』で、10大ニュースの第2位に「船上山宿泊学習」が選ばれたことにも表れている。

③ 反省と課題

実行委員会を組織し、綿密に計画を立てて取り組んだ校外宿泊学習であり、一応の目的は果たしたが、その反面、当日「ゆったりと過ごせる時間が欲しかった」という反省点がある。生徒の思いも同様であったろうと思われる。今後もこの学習で、「青年期にある生徒」の思いや主体性を求めていくように努めていきたい。

(宮脇 一善)